

井戸端だより

【特別号】
発行日
1998. 12. 14
発行
くらしの学習会

制作協力
朝日新聞大阪本社
出前朝日事務局
電話 06(201)8700

対話しよう

出会い塾が10回目になった。この座談会は子ども達がゆっくり対話できる場を作ろうと思って始めた。今までに来て下さったゲストは海外青年協力隊OB、新聞記者、南米の遺跡を旅行してきた人、そしてアメリカ・オーストラリア・中国・インド・グルジアの人達だ。皆、自分の考えをしっかりと持ったすてきな人達だった。子ども達に「必ず一言はしゃべりましょう」と言っているが、大人の心配をよそに、話はずんで時間内におわったためしがない。その姿

子供たちと

を見ると、子ども達はたとえ言葉たらずでも体全体で感覚的にゲストや他の参加者達と交信する能力を持っているように思う。大人ももちろんゲストの持つ豊かな世界にふれて日常の生活から少し離れた空気を楽しめる。座談会の帰り道には何となく気分が元気になって「人ってまだまだ捨てたもんじゃない」と思う。

私が子供の頃は田舎だったせいもあって、周りはほとんど農家だった。職業なんていっても農業と教師、それに警察官と医師がちらほらという程度だった。それでも近所には職業不明瞭なお兄さんがいて、まつたけ採りの話をしてくれたり、いつも同じ所に座っているおばあさんが、狸に化かされた男の話をしてくれたりした。どれも役に立ちそうな話ではなかったが結構楽しかった。

ああ、この人はこうゆうことが好きなんだとか、このおばあちゃんにも若い頃があったんだとかぼんやり考えていた。それもあって、今子供達がゆっくりと話を聞いたりしゃべったりする場を作りたいと思うようになった。生身の人間と対話することがこんなにも楽しくて充実した気分させるものかと思う。

蜜蝋作り

楽しかった蜜蝋作り

秋を訪ねて 10月例会

10月の例会として久しぶりに(昨年11月以来)山之内に出かけました。「ロウソク」を作ると聞き「内子の和蠟燭」をイメージしてしまった私たちのような素人につくれるのかと心配していたら「ミツロウ」とのこと。「はて『ミツロウ』とは?」とたずねてみると、蜂の巣から蠟をとり蠟燭を作るそうだ。清々しい秋空の下、6人で出かけました。現地に着くと、すでに準備ができ、「蜜蝋作りの先生」渡部浅次ご夫妻が待っていてくださいました。挨拶もそこそこに「蜜蝋作り」を見せてもらうことになりました。(ご夫妻の畑で焼きたてのとうきびを頬張りながら)

材料はこの山にいる蜂(地蜂)の巣から蜜を採った後の巣を使います。六角形に整った乳白色の巣にはまだ蜜が残っていて、それを頬張ると濃厚で香しい甘さが口いっぱい広がり市販の蜂蜜とは全く違った味に驚きました。作る手順は下記の通りです。

- 1) 蜜を採った後の巣を熱湯で溶かす。
- 2) 浮いてきたゴミをすくいとる。
- 3) 鍋を火から下ろし表面に固まったロウを集める。
- 4) 集めたロウを玉じゃくしで溶かす。
- 5) あらかじめ二つ割りにした竹筒に芯入れロウを流し入れ紐で縛る。
- 6) 冷やし固まった蠟燭を取り出す。

できあがるまでには、木々の間からは気持ちのよい風にさそわれてか4~5種類の蝶が飛んできたり、蛇やトカゲも出てきたりと、にぎやかな「蜜蝋つくり」となりました。

お昼は、蜜蝋作りにも使った、渡部さんたち有志の方々がこの木を使って焼き上げた炭を使い心づくしのバーベキューをい



ただきながら楽しいひとときを過ごし、ご夫妻をお見送りました。

その後、「泉の絵はがきの収益利用をどうするか」について話し合い、泉の絵はがきを印刷し、町内の全世帯か町内の小中学校

の児童・生徒に配布してはどうかとの意見が出され、11月例会で具体的に話し合うことになりました。

今(12月になって)、あの日作っていた黄色の蠟燭をとめています。

次の講師は犬伏さん

11月例会

11月21日(土) 町民会館にて

1> 1994年に三ヶ村泉の絵ハガキを作った、1部350円で販売しました。その収益金が28万円あります。これでまた絵はがきを印刷して、今度は重信町なほのの小中学生に無償で配ろうということになりました。まずは、各小中学校にお願いに行ってもよいかどうかを町の教育委員会にお聞きしました。今はその返事待ちの状態です。もし教育委員会や各小中学校の理解が得られて配布することになれば子供向けにちょっとした説明書きを添えたいのでその文面をみんなで話し合っ作りしました。絵はがきが

印刷されたら6まいのセットを組んで封筒に入れる作業がありますから、みんなの都合のいい日を決めて集まることにしました。

2> 前々から井戸端便りの作成についてもう少し上手に作りたいという希望があったので今回の「出前朝日」に申し込みました。運良く来てもらえることになったので新聞の記事をみんなで手分けして書くことにしました。締め切りは12月5日きく菊池まで。

「出前朝日」のバスが来るのは12月14日午後1時、場所は町民会館(婦人室)です。

3> 10回目の出会い塾は12月26日(土)夜7時から8時半です。今回は建築家で民家研究家犬伏さんをお呼びしています。イタリアとドイツのスライドとお話です。



ナポリのお城です

1月30日(土)9時半から総会を開きます。(会計報告、今年度の活動計画等)

場所は町民会館調理室です。

総会の後はお馴染みのヒラさんの指導のもと本格的インドカレー

お知らせ

に挑戦してみませんか。ヒラさんはインド人、ご主人はバングラディッシュの方、日本の空気の中で作るカレーは3カ国の味がするかもしれません。手作りカレーを食べながら、新年会。ワクワクしますね。材

料などの手配もありますので出席の方は1月25日までに林までご連絡ください。

★ ★ ★

☆☆☆編集後記☆☆☆

今回の井戸端だよりは、朝日新聞の新聞作り出前教室「出前朝日」のご協力により完成しました。最新機器を使って、いい勉強になりました。朝日の皆さん、ご苦労様でした。

出前 Asahi

新聞づくり移動教室



イラスト・オーシロ カズミ

新聞づくり 3つのポイント

③ 読まれる紙面を
編集ではレイアウトも考えます。一番大きく扱う原稿はなにかを決めたら見出しを考えます。記事の内容を的確、簡略に示し、それだけで内容が分かるというのが見出しの基本です。さらに一歩進めて、見出しを読んで、記事そのものに興味をもってもらえたら、それは名見出しです。ちょっとオシャレしてみるのもいいでしょう。写真も大切なポイントです。一枚の写真が自らの記事より雄弁に語りかけることがあります。白い画用紙に絵を描くつもりで、楽しみながらレイアウトしてみましょう。

依頼原稿だけで新聞を作るのは工夫がありません。自分で記事を書いてみましょう。テーマが決まったら取材をします。その中で、当初のテーマよりもっと面白い話が転がり込んでくるかもしれません。そうすればシメタも不要です。美辞麗句は不要です。原稿ができた原因はたいてい取材不足に陥ります。読者が知りたいのはなにかを念頭におきつつ、多方面に当たってみま

読者が読む必要を感じる記事、読んでみたくなる記事が載ってこそ新聞です。まず編集会議を開きテーマを考えます。ずっと前に終わった行史の特集や「長」の付く人ばかりが登場する紙面では興ざめです。読者の要求

① 読まれる新聞を

・関心がどこにあるかを考えて企画をたてます。次に依頼原稿ならだれに頼むか、座談会なら出席者はだれにするか、ルポならだれが書くか、写真はどんな構図をねらうかなどを決めていきます。

「出前朝日」問い合わせ先

朝日新聞大阪本社「出前朝日」事務局
〒530-8211
大阪市北区中之島3-2-4
TEL 06-201-8700
FAX 06-231-4976
(*99年1月1日から局番の前に6が付きます)

昨日も、今日も、
明日も、朝日と。



1999
朝日新聞 創刊120周年

1999年1月25日は、
朝日新聞創刊120周年です。

朝日新聞社は、120周年をひとつの節目にさらに未来を見つめ、暮らしのことから世界のことまで、これまで以上に核心に迫る取材を徹底して行う所存です。そうして読者のみなさまが正しく、また自信をもってご判断いただけるよう、よりわかりやすい紙面にして、迅速にお届けすべく心がけてまいります。

朝日新聞、出版物ご購入に関するお問い合わせは、ASAまたは下記フリーダイヤルで。



0120-33-0843
朝日が サンサン オハヨーサン

井戸端だより

【特別号】
発行日
1998. 12. 14
発行
くらしの学習会

制作協力
朝日新聞大阪本社
出前朝日事務局
電話 06(201)8700

特別展へのお誘い

来年度、南日本自然史研究会の博物館では下記の日程で特別展が開催されます。

この博物館には楠先生のコレクションが展示されています。

- 3月18日-4月11日
道後姫塚の化石と中生代に栄えた生物展
- 4月23日-5月16日
世界の蝶展
- 6月11日-7月11日
世界の甲虫展
- 9月14日
-10月17日
水晶と久万町の
晶洞鉱物展
- 11月2日-11月28日
私のコレクション展

雪 虫

北海道はもう雪の季節を迎えている。私は、昨年の9月に札幌から松山に移り住んだのだが、辺り一面が白一色になる雪景色は今でも忘れがたい風景の1つだ。

北海道からの雪の便りは、冬の間中、私を北海道へ誘い続けることだろう。

さて私は、雪と聞いてある虫を思い出す。雪虫(ユキムシ)だ。正式名称はトドノネオオワタムシである。ワタムシという名前から想像できるように、体には綿のような細かな白い毛がはえている。

この虫の飛ぶ様子は、まるで雪が舞うように見える。だが、そのために雪虫と呼ばれるのかといえば、それだけではないように思う。

雪虫は、初雪が降る少し前に飛びはじめるのだ。

だから北海道の人は、雪虫が飛ぶのを見て、雪の季節が近づいていることを知る。「雪虫が飛んだね」というのは、実は「もうすぐ雪が降るね」という意味なのだ。

身近な自然アキニレ林

かすみの森公園を歩く

重信町を流れる重信川の河畔に、かすみの森公園がある。休日には多くの家族連れでにぎわう、住民に親しまれている公園だ。そこにアキニレ(秋楡)の林がある。アキニレは美しい花を咲かせるわけでもなく、ドングリのような目立つ実をつけるわけでもない。知っている人はそれほど多くないだろう。けれども愛媛県では、川の近くなどによく見られる樹である。住民によると、公園が作られる前から、そこにはアキニレ林があったそうだ。

さて現在、この林は2つの異なるタイプの林から構成されている。この2つの林は隣り合っているのだが、1つは下草が刈られた見通しのきく林で、下流側に位置している。足元には芝が植えられ、公園らしい景観となっている。もう1つは、下草が伸び放題の上流側の林である。

この下草が伸び放題の林の方を、私は好んで訪れる。なぜなら、この林では、下草が刈られた林よりもはるかに多くの発見があるからだ。整備された公園では味わえない面白さがある。例えば、ここには数種類の樹木が生えているため、新緑や紅葉の時期には多くの色で彩られる。また、刈られていない下草の中に、美しい花や実をつけるものがある。よく見ると、若いアキニレの樹も育っている。この林では、頭の上にも足元にも、うれしい発見がある。未来を想像することもできる。

この林の面白さはこれだけではない。隣りの林に比べ、訪れる野鳥、棲んでいる虫の種類も数多い。下草の中を歩いていると、野鳥がチッチッと鳴きながら、一緒に移動することもある。

一方、下草が刈られた林では、新しい発



見や生き物との出会いが極端に少ない。整備されすぎていて、野生の動物や植物が生きてゆけないのだ。その上、残された樹木は下方の枝を切られ、根を踏まれ、命を縮められている。

「豊かな自然」と聞くと、熱帯雨林やカナダやアメリカの広大な森林などを思い浮かべる方が多い。けれども、自分の家の近

くにも豊かな自然の残る場所はある。近くにありすぎて、重要さに気づいていないだけなのである。

ところが気づいてみると、そのような場所がどんどんなくなりつつあることにも気づく。

年咲いていた花が今年は咲かないというのは寂しいことである。

蜜ロウはどこから？

くらしの学習会によって、ニホンミツバチの巣からロウソクをつくる講習会が開催された。

今回つくったロウソクの材料となったのは、ニホンミツバチの巣材、つまり蜜ロウである。ミツバチの巣と聞くと、たくさんの六角形が整然と並んだ様子が思い浮かぶ。この六角形の1つ1つが巣室であり、その壁をつくっている材料がロウである。ミツバチは、ロウを森のどこかで見つけて、運んでくるのだろうか。いや、そうではない。

実は、ミツバチは糖分を食べて、ロウをつくることのできる。このロウは腹部にあるワックス腺から分泌され、腹部の体節の間から薄いロウ片として現れる。ミツバチは、これを口でねり、巣をつくるのである。

その際に、同じ大きさの働きバチが首の傾きと触角を定規にして巣室をつくるため、あのように寸法が均一の六角形ができあがるというわけだ。

私たちは、このロウをいただいて、ロウソクをつくったわけである。

ところで、私たちが普段食べているハチミツは、セイヨウミツバチが集めた蜜である。セイヨウミツバチは外来種で、体が黒っぽいニホンミツバチに比べ、全体的に黄色いのが特徴である。最後に、ニホンミツバチがセイヨウミツバチに負けてしまうのではないかと心配している人のために付け加えるならば、セイヨウミツバチはニホンミツバチとは異なり、スズメバチから身を守る方法を持っていないので、野生化する可能性はないのである。



三ヶ村泉での自然観察(重信町)

ある地域に外来種が移入されたとき、在来の近縁種との交雑によって雑種が生じることがある。その結果、在来種が持つ本来の遺伝特性は失われてしまう。これを遺伝子汚染という。ところが、遺伝子汚染は同

遺伝子汚染

じ種類の生物でも起こる。同種でも、地域によって遺伝子型の異なる場合があるからだ。例えば、メダカを遺伝子レベルで見ると、北日本集団と南日本集団とに分けられる。南日本集団はさらに細かく分けられ、

四国には3つのタイプのメダカが生息している。つまり、高知のメダカを愛媛の川に放すと、その中間型のメダカが増え、愛媛のメダカが絶滅してしまう可能性も出てくるというわけだ。ゲンジボタルにも西

日本型と東日本型の2つの遺伝子型がある。イベントなどでホタルを放す場合、その地域の在来種を繁殖させた上で放してほしい。そうしなければ、在来種を絶滅させてしまう。遺伝子汚染を広げてはならない。

井戸端だより

【特別号】
発行日
1998. 12. 14
発行
くらしの学習会

制作協力
朝日新聞大阪本社
出前朝日事務局
電話 06(201)8700

ボランティアと行政

最近、ボランティアという言葉をよく耳にする。そして様々な被災地に仕事や学校を休んで駆けつける人達の姿をテレビなどでよく目にする。その優しさを行動力には頭が下がる。しかし、一方で、どうしてこんなことでボランティアに頼らなければならないのかと思うような場面も少なくない。必要な所に、必要なだけの人員と予算を配することが、行政の大切な仕事ではないのか、と思ってしまう。私達は、最前の努力を前提に、それぞれ弱い立場になった時は、不安を持たずに生



活できる為に税金を納めている、と思いたい。天災にあつと、不自由を持って生まれてくること、老いること、どれもこれも誰にも責任はない。にもかかわらず、そうなることを不安を持たない人はいないと思う。“不自由と不幸は同意語ではない”。心からそう思える社会になったとき、ボランティアという言葉も今ほど耳にしなくなるに違いない。

こんなことしてます!

異文化と付き合う

東予のある商工会議所で10月末から行われた中国人研修生の日本語研修を担当した。1日6時間、10日間コースの集中講座だった。

事前に聞いていた話では、「全然日本語はできませんよ」ということだったが、ふたを開けてみれば初日のテストで、ひらがな・カタカナの読み書きはもちろんのこと、初級の文法項目もある程度は理解していることがわかった。

36名ということで、テストとインタビューの結果で、2クラスに分け、一方を運用・応用力養成クラスと位置づけ進めた。

どちらのクラスも活気にあふれ、その熱気にこちらが圧倒されそうになる程だった。商工会議所の人の話では、最近日本へ来たがる研修生の数が増え、それで、競争率も高くなり、日本語も一生懸命勉強してくるのかもしれないとのこと、実際には中国で同種の工場で働いている人ということなのに、中には役所勤めの公務員や、職業訓練所の先生が混じっていたりすることもあるとのこと、大卒の人も珍しくないとのこと。日本語研修のあの集中力と習得力のすごさは、いろいろな事情を反映しているものらしい。

研修はとりあえず1年の予定で、その間工場実務研修し、会社から5~6万円支給されるらしい。1年研修が終わったところで、本人が希望し研修先が認めれば今度は17万円ぐらゐの給料がもらえるということだ。だいたい半数ぐらゐの人たちは日本に2年いるという。

中国側は、日本に研修生を送り込めば送り込むだけ、お金が入る仕組みになっており、もっと研修を受け入れる業種を増やす

県在住外国人 (愛媛県国際交流センター資料)

年	6	7	8	9	10
順位					
総数(人)	4, 222	4, 146	4, 294	4, 427	4, 958
1	韓国・朝鮮 1, 839	韓国・朝鮮 1, 838	韓国・朝鮮 1, 751	韓国・朝鮮 1, 754	韓国・朝鮮 1, 729
2	中国 747	中国 866	中国 999	中国 1, 147	中国 1, 451
3	フィリピン 511	フィリピン 496	フィリピン 448	フィリピン 490	フィリピン 614
4	ブラジル 341	ブラジル 217	ブラジル 249	ブラジル 212	ブラジル 237
5	ペルー 189	ペルー 150	米国 156	米国 161	米国 170
6	米国 150	米国 141	ペルー 120	インドネシア 105	インドネシア 136
7	インドネシア 71	インドネシア 45	インドネシア 103	ペルー 86	ペルー 67
8	マレーシア 46	カナダ 41	カナダ 49	英国 55	カナダ 66
9	カナダ 37	マレーシア 40	英国 40	カナダ 60	英国 58
10	オーストラリア 35	スペイン 33	マレーシア 38	タイ 37	タイ 44

よう圧力をかけているようだ。

今回の研修で感じたことは多くあった。この36名の中国人研修生は実に元気がよく、活気に満ちていた。エネルギーで逞しい。国民性なのか、たまたまここに集まった人がそうなのかは分からないが、教える側としては実に心地よいパワーであった。反応が早い、声大きい、ユーモアに富んでいる、話題に発展性がある、いろいろ教えられることも多かった。

往復3時間の道のりはきつかったが、6時間の授業は疲れるというよりは、心地よい充実感でいっぱいであった。

彼らが、今後研修先で、この授業の時のように元気で、生き生きと研修してくれることを期待する。決して安価な労働力として扱われるのではなく、いろいろなものを身につけて中国に帰り、日本との架け橋になってもらいたいものである。

植物画との出会い

わが家に庭には、四季折々な花が咲く。こう書くと、手入れの行き届いた庭のようだが、実際は、限られた植木鉢と、数種の野菜以外はほとんど手入れもせず、こぼれ種や、鳥や風が運んできた種が、運良く発芽し、このところの異常続きの天候にもめげず、開花にこぎつけたら、というまさに“運まかせのガーデン”である。最近流行のガーデニングとはほど遠いが、私には、この空間が妙に落ちつける。こんな私にも、春先と夏の終わりには、申し訳程度に草引きもするが、小さな芽を見つけると“何かになるかもしれない”そう思ってしまう。ほとんど抜けない。そんな草から色々な可憐な花が咲く。ほとんどが名前もわからないまま季節が過ぎていくが、可憐な薄桃色の小さな花の名前が“ママコノシリフキ”

だと知ったときは驚いた。

そんな花を描いたら、と思っていたとき白形さんのボタニカルアート教室が開講され、さっそく入会した。彼の筆先からは次々に、清々しい“花”が生まれ出す。白形さんは毎回、繰り返す。

“上手に描こうとしないこと”“テクニックで絵を処理しようとするな”“しかし上手に描きたい”“テクニックを覚えたい”からなかなか抜け出せない。多くの人が、白形さんの絵を見て、ホッと心とむのは、彼の自然に対する優しさが伝わってくるからに違いない。そんなことを考えながら、今日も“何か”を探して、庭に出て、ネギをかきわけ、生茂ったアスパラを持ち上げて、目を凝らしている私の傍らで蝶が遊んでいる。



このところ私がはまっているものは「ぼんしん」。地方によっては「でんち」ともいうが、ようするに「袖なしの綿入りはてん」のことだ。87歳の私の母親が作ってくれる。今や、わが家は夜になると全

日々雑感

員がこれを着ている。なんといっても軽いのが一番の魅力。かといってフワフワと体から浮くでもなく、反対にベタリとくっつくわけでもなく、ちょうどいい距離でなじんでくれる。40~50年前の父や母や祖父

母の着ていた着物をほどこいて作るので、なんとも柄の古めかしいのは仕方がない。家族でこれを着ていると、何かこう江戸時代の農民になったような気がしてくる。これでワラジをはいてクワでも持てばできあ

がり、そのまま時代劇だ。それでも天然素材の木綿と綿は、体にやさしい。私も年をとったら、この「ぼんしん」を作って、娘や孫や近所の人達にあげるのを、生き甲斐にしようと思っている。